

表紙は、川野先生撮影の銀杏と鹿の涼しげな秋を感じさせる写真です。しかし、今年の各月の平均気温は観測史上最高を続け、テレビや町内放送からは「昔の夏と違います、熱中症に気を付けて」と連呼しており、ほんの30分程度、草刈りをする程度でもクラクラしてしまう危険な毎日です。

会報の最初には、6人の方々の退任の挨拶が寄稿され、多くの先生が数年、安里先生に至っては20年以上も医師会の仕事に携わってられました。それぞれの本業をしながら、医師会の業務を行うのは大変で毎週の理事会が憂鬱であったとの記述もありご苦労されたことと思います。私も県医師会広報に関わり2年が経ちましたが、会報誌に記載されている内容だけでも各代議員会報告、教育関連、月間行事、お知らせなど幅広く、各先生方や事務方のご尽力によるもので体力的にもとても大変だったことでしょう。

北部保健所長木村先生へのインタビューは、とても興味深く拝読しました。調べてみると、国民の衛生水準向上で明治元年に衛生行政が始まり、昭和の初めには国民健康指導相談機関として保健所は設置、コレラや結核など感染防止対策を長年にわたり担ってきました。本文では、

近年の保健活動の変化について述べられていますが、直近でも新型コロナ感染症対策に重要な役割を果たしてきました。これらの危機管理、さらには災害対策など通常時とは異なる緊張をしいている中で中心的に活動する場面もあり、人員不足を懸念されています。保健所は、まさしく私達の生活を支える重要なインフラストラクチャーです。木村先生の座右の銘「漂えど沈まず」に対して、久貝先生の臨機応変という返しも医療の先輩方の人生訓のようで勉強になりました。

さて、県医師会報が早くも9月号を迎えました。「ジャンネーの法則」というのがあるようで、時間の心理的長さは年齢と反比例すると前出の哲学者はなぞらえています。一方で、あまり好ましくない事柄を行う際には、得てして時間が長く感じるとも言われます。そのような場合には、自分が成長している時と感じることが出来ればいいのですが自分には到達出来そうもない領域です。

最後に銀杏の花言葉は、長寿、鎮魂、荘厳とのこと。魂を落ち着かせ、美しく生き、それが長寿につながるのかもと勝手に想像しながら書いた編集後記でした。

広報委員 久志 一朗

